

T. S. Eliotとキリスト教

——(1) 生涯、詩、詩劇、文芸批評におけるキリスト教的要素のスケッチ——

T. S. Eliot and Christianity

(1988年4月7日受理)

橋内幸子

Sachiko Hashiuchi

Key words: キリスト教, T. S. Eliot

文学作品や批評は、作家や批評家の文学的信念の展開の中に、必ず自伝的告白の声を響かせているものである。T.S. Eliotのように、詩人であるとともに批評家であり、ヨーロッパの文化的伝統を至上のものとして、アメリカからイギリスへ帰化したコスモポリタンの存在であればなおさらである。彼の一生は、文化的始源なるものへの探究と正統への絶対的回帰とに特徴づけられている。詩人・批評家としての自覚と、詩という言語芸術の可能性、及び文化的伝統についての求道的な姿勢は、1944年にまとめられた*Four Quartets*で頂点に達し、「時」を中心的主題とするこの長篇詩には、Eliot自身の長期にわたる文学的苦闘の述懐が明確に示されている。

So here I am, in the middle way, having had twenty years——
Twenty years largely wasted, the years of *l'entre deux guerres*——
Trying to learn to use words, and every attempt
Is a wholly new start, and a different kind of failure¹⁾

一方、'Tradition and the Individual Talent'(1919)を始めとする批評・評論には、それらが散文であるだけに、詩作品より直截的に自己の信条を語るEliotの声が聞かれると断言できよう。イギリスを中心とするヨーロッパ全体をその射程に収めた文芸批評と文化論は、年代的に見てゆくと、詩人として、また批評家としてのEliotの成長と成熟を辿ることができるが、それらは詩作品と併せてイギリスの文学界にきわめて大きな影響を与えている²⁾。

そして、詩人・批評家・思想家としてのみならず、危機の時代と言われる現代に生きる個人としてのEliotが、終生の精神的・霊的拠所としたのがキリスト教、とりわけ英国教会の信仰であった。もとより、彼の生涯はさまざまなキリスト教の宗派の影に彩られている。Eliotはアメリカの中西部ミズーリ州セント・ルイスで生まれ、宗教的には三位一体論を否定し神の単一性を主張するユニテリアンの教育を受ける。しかし、家系的にはニューイングランドの厳格なピューリタンの流れも汲んでおり、またハーヴァードでの学生時代には中世的キリスト教神秘主義の著作を数多く読んでいる³⁾。そして、1927年にイギリスに帰化し、改宗後、有名な自己規定「文学においては古典主義、政治においては王党派、宗教においてはアングロ・カトリック」("classicist in literature, royalist in politics, and anglo-catholic in religion")⁴⁾を行なうのである。さらに後年、'Goethe as the Sage'(1955)の中で、「私のような、カトリック的な傾向の心情とカルヴィンの遺産とピューリタンの気質とをかね備えている人間にとって、ゲーテはなかなか容易ならぬ障害を提示するのであります」(For anyone like myself, who combines

a Catholic cast of mind, a Calvinistic heritage, and a Puritanical temperament, Goethe does indeed present some obstacles to be surmounted)⁵⁾と述べている。宗教的信念と信仰は、Eliotにとって生涯の基本的指針になったばかりでなく、彼の作品の中でも、詩や詩劇の中心的主題の一つとなり、文芸批評の重大な判断基準となっている。そこで本稿では、Eliotとキリスト教との関係を彼の生涯と作品の中にスケッチ風に概観することにする。

I

Eliotの詩には、古今東西の書物からの引用がエピグラフとして、また、詩の中に効果的に使われていることが多い。一方で、彼についての批評書や評伝には、彼自身の詩や批評の一節がエピグラフや章のタイトルに選ばれており、引用部分の内容と表現としての巧緻さとその選択の的確さにおいて、彼とその周辺の人々には、言葉についての感覚と興味が独自の形で存在することが理解できよう。そして、彼の家系、幼年期から成人するまでの教育環境、及び1927年の改宗とイギリスへの帰化までの期間を、伝記的事実、詩、批評の面から考察するにあたり、やはり彼の詩の一節からの引用より始めようと思う。

Home is where one starts from. As we grow older
The world becomes stranger, the pattern more complicated
Of dead and living⁶⁾

Eliotの家系と家訓、そして教育環境は、まさにカトリック、カルヴィニズム、ヒューリタニズム、ユニテリアンの主義主張を体現する「死者と生者が織りなす複雑な図式」であった。

カルヴィニズムとそれに立脚したピューリタニズムは、神の絶対性と人間の原罪説、救済についての予定説、及び選民思想を特徴とする厳格な教義を持つ。Eliotの祖先は17世紀にイギリスのサマセットのイーストコーカーから、ボストンを中心とするマサチューセッツ植民地へ移住してきたピューリタンであった。そのボストン近辺から、彼の祖父であるWilliam Greenleaf Eliotがユニテリアンの牧師として、セント・ルイスに移ってきて教育の分野で活躍したわけであるが、彼の父親のHenryの時代になっても、祖先達のニューイングランドの宗教的・道徳的熱情と実務的能率への信仰が依然として残されていた。ここに、精神的遺産としてのカルヴィニズム、教育の基本的方針としてのピューリタニズムの影の揺曳が明確に浮び上る。なお、アイルランド系の乳母であるAnnie Dunneが彼の幼い頃カトリック教会に連れて行き、カトリックのミサ典礼の美しさが彼を魅了したことも評伝が伝えている。

「わが初めこそわが終り」(In my beginning is my end)は*Four Quartets*の‘East Coker’の冒頭の神秘的な一句であるが、Eliotの霊的成長が到達した地点を象徴的に物語るものである。祖先達とその墮落に反抗して国を捨てる原因となった英国教会への帰依は、Eliotの最終的なゴールであった。より始源的なもの、普遍的なもの、秩序と伝統への傾斜は、Eliotの生涯のどの時期をとってみても顕著である。セント・ルイスを離れてボストンのハーヴァードで学生生活を送っている時も、Irving Babbittのヒューマニズムに心引かれながらも同時に、Danteを発見している。第一次世界大戦前夜より、F.H. Bradleyの哲学研究のためヨーロッパに渡り、イギリスで最初の妻となったVivienneと出会い、生活上の苦しみの中で長篇詩*The Waste Land* (1922) や‘Tradition and the individual Talent’ (1919) を始めとする批

評を書いている時も、その根本的な原理と態度は、多様性の中の統一であり、伝統と秩序であった。いわば普遍的な(catholic)ものをピューリタンの刻苦勉励さで追究していたとも言えるだろう。

Eliotが幼少の頃から言葉遊びに熱中し、言葉に対して特異な能力を示していたことは、T.S. Matthewsによる彼の伝記⁷⁾にも記されているが、ハーヴァード大学の文芸誌*Harvard Advocate*の編集に参加し、Arthur Symonsの*The Symbolist Movement in Literature* (1899)を読んで、フランスの象徴派詩人Jules Laforgueを始めとする詩人達の詩に心を奪われたことに、やはり青年時代に特有の同時代への共鳴と敏感さが見てとれよう。詩集*Prufrock and Other Observations* (1917)に収められた詩篇は、いずれも愛の不毛と都市生活者の倦怠、性への恐怖と嫌悪などを主題としながら、Laforgueから学んだ会話体や仮面^{ペルソナ}の手法を用い、現代の退廃を冷笑的な態度と諷刺の精神で描いている。Eliotの初期の詩に登場する人間群像達は、それぞれ特有の仮面^{ペルソナ}を付けられてはいるものの、不可知論に端を発したヒューマニズムの否定的側面の最終的な結果の体现者達である。即ち、神という精神的な拠所を喪失し、人間中心主義を極限まで押し進めた果てのエゴイズムと虚無に魂を支配され、孤独と逡巡に苦悩する存在である。‘The Love Song of J. Alfred Prufrock’ (1910—11)の話者、Prufrockはその代表的人物であり、女性への求愛という、彼にとっては「途方もない難問」(an overwhelming question)をかかえて、「手術台の上で麻酔をかけられた患者のように」(Like a patient etherised upon a table) 大空に広がる夕暮れの中を出かけて行く。自己の人生を神の基準ではなく「コーヒーの匙ではかりつくした」(I have measured out my life with coffee spoon) Prufrockの求愛の結果は絶望的であり、彼の水死のイメージで詩は終る。さらに‘Gerontion’ (1919)では、死期の迫った老人である主人公が、キリストに対して「かつては御心のおそばにいましたが、引き離され/恐怖のうちに美を、審問のうちに恐怖を失くしました」(I that was near your heart was removed therefrom/to lose beauty in terror, terror in inquisition)と述べ、現代人の精神的不毛、及び死と再生の主題へと大きく振幅されていく。

Eliotは*The Use of Poetry and the Use of Criticism* (1933)の中で、詩を人生の批評とするMatthew Arnoldの主張に反対して、「詩人の本質的な特権は、美と醜悪の底を見ぬき、虚無や恐怖や栄光を見きわめる能力を持つことである」(the essential advantage for a poet...is to be able to see beneath both beauty and ugliness; to see the boredom, and the horror, and the glory)⁸⁾と強調している。*The Waste Land*は五部構成の433行にわたる長篇詩の中に、現代人の精神的荒地の状況とそこからの回復と救済の予兆を主題に、エリザベス朝劇詩作品、聖書、Danteの*The Divine Comedy*,ギリシア神話、聖杯伝説、サンスクリットの経典などの引用を、さまざまな場面の描写や表現に配置し、時空を越えて広がる人間の虚無、恐怖、そして神の栄光への接近を包括的に提示したものである。Ezra Poundの手で、元の原稿の長さから約半分の長さに削除されて発表されたこの詩は、主題について物語るというよりも、忘れ難い古今東西の本の語句や文の断片が全体の意味を支えつつ、光芒を放つコラージュ的構成になったため、醜悪な様相を呈する現代の絶望的な荒地たる精神状況へ、人間の条件の普遍性と詩的美とをもたらす結果となった。この詩に引用、または暗示されるキリスト教的信仰の内容は、聖書、聖杯伝説、St. Augustineの告白などである。第一部の「死者の埋葬」では「生きながらの死」の人生を生きる人間一般が当面する精神的不毛の恐怖を予言的に語っているため、旧約聖書の「エゼキエル書」「伝道の書」からの引用を効果的に用いて、神に背いて信仰を失なった人間に対する旧約の怒れる神の言葉がもたらす恐怖が暗示される。人間の世界は「砕けた偶像の山」(A heap of broken images)であり、人間達は「ひと握りの砂の中に恐怖を見せられる」(I will show you fear in a handful of dust)のである。また

St. Augustineの見たカルタゴの墮落の地で燃えさかっている情欲や迷いの炎を、神への禁欲的な祈りで消していくのは第四部「火の説法」である。第五部「雷の言葉」で基本的な枠組を担うのは聖杯伝説であるが、同時に新約聖書「ルカ伝」のキリストの受難のみならず復活も鮮明に二重写しにされている。聖杯堂に近づく聖杯の騎士が幻覚のうちに見たものは、エマオの村へ旅を続ける二人のキリストの弟子達が見た救い主の復活した姿と重なり合う。

Who is the third who walks always beside you?
When I count, there are only you and I together
But when I look ahead up the white road
There is always another one walking beside you⁹⁾

*The Waste Land*は、再生と救済のための雷神の言葉、「与えよ、共感せよ、自制せよ」と、祈りの言葉で終る。

*The Waste Land*は賛否両論の評価とともに、現代詩の世界に衝撃と活性化への動きを与えたことは確実であった。Eliotの詩の創作の傾向とその過程の理解のためには、彼自身の文芸批評の中に語られる詩人の肉声に耳を傾ける必要がある。さて、1919年はEliotにとって、文芸批評上の自己規定、アイデンティティ確立の年と言えよう。まず、'Tradition and the Individual Talent'では伝統と個性の関係について、そして「歴史的感覚」(historical sense)の用語的定義がなされる。伝統とは通時的な文学の潮流のみならず、共時的秩序も形成しつつ全体を変えていく不滅の流動体の様相を持つとEliotは述べ、19世紀の個性・独創尊重の趨勢に反対の立場を表明する。また、歴史的感覚とは「過去が過去たるのみではなく、過去が現存しているという感覚」(a perception, not only of the pastness of the past, but of its presence)であり、ヨーロッパ文学の伝統と同時代性との調和を感じる能力であり、作家達を伝統に根ざすように働く感覚である。従って、あるべき詩人の詩作態度は、伝統へ昇華されるがための「情緒や個性からの脱却」である。

Poetry is not a turning loose of emotion, but an escape from emotion;
it is not the expression of personality, but an escape from personality.
But, of course, only those who have personality and emotions know
what it means to want to escape from these things.¹⁰⁾

この姿勢はさらに、同年発表した'Hamlet'における「客観的相関物」(objective correlative)の概念にも通底するものである。Eliotは*Hamlet*を失敗作と断定し、その理由をこの客観的相関物の欠落のせいであると説明している。この概念とは、文学作品で「ある情緒を表現する方式となるべき、物、状況、事件」(a set of objects, a situation, a chain of events which shall be the formula of that particular emotion)¹¹⁾であり、その情緒を喚起させる力を持つものである。ところで、非個性化、情緒からの脱却、より大なるものへの帰属意識について、これまたピューリタンの傾向を感じさせるのは不思議ではないと思われる。たとえ、知識や知性に鋭い感覚をうかがわせる人間でも、自己についての不完全さを常に意識せざるをえない完全主義者は、その完全主義が否定的な判断へ向かってしまうことがあるからで

ある。Eliotも時としてその片鱗を覗かせる。*Hamlet*の持つ劇としての豊饒さは「客観的相関物」の枠をはるかに越えているからである。なお、同じく1919年に執筆された‘Ben Jonson’の中で、彼はShakespeareの偉大さを理解しながらも、Ben Jonsonをイギリス文学史上最初の詩人＝批評家として賞賛し、自己をこの系統の中に位置づけようとする。創作行為の中に知性ある批評精神の指針を必要とすることを認めていたEliotにとっては当然の結論である。さらに、1921年の‘The Metaphysical Poets’では、18世紀に英詩の表現における感受性と思想の分裂が起った事実を認めた上で、彼自身はDonneを始めとする17世紀の形而上詩人の流れに連らなることを明確にしている。形而上詩人達は、「自分の思想をばらの匂いのように直接に感じた」(feel their thought as immediately as the odour of a rose) のであり、Eliotはこの能力を、難解で暗示的にならざるをえない現代詩の創作に必要な条件としたのである。

II

アメリカ人にとって、ヨーロッパはその長い歴史的遺産と文化的伝統のゆえにたえず憧憬と崇敬的であり、また、かつてはヨーロッパの内部的墮落と腐敗を嫌悪して断絶したため、自由で革新的なアメリカという国家形成を文化的にも成し遂げるための複雑な「愛憎関係」(love-hate relations) の相手と認めることができる。Eliotがイギリスに来てまず直面せざるをえなかったのは、二度にもわたる世界大戦の悲惨な結果であるヨーロッパ文明の崩壊と精神的荒廃であった。Stephen Spenderはその事実の証人としてのEliotらの姿を次のように述べている。

…Pound and Eliot left America because it had no centre on which they could construct their vision of civilization, but having reached Europe their imaginations told them that the old European civilization was dead. They came to Europe for a new beginning, and realized, in fact, an end.¹²⁾

Eliotの生涯を知る者は皆、彼の一生がさまざまな意味で苦闘の一生であったことを認めることができよう。輝しい古きヨーロッパ文明の再建の一端を、キリスト教の伝統と普遍性と永遠性に見い出そうとした彼は、まず自ら英国教会、しかもカトリック的側面を残したアングロ・カトリックへの改宗を決意している。1927年の改宗から、後期の詩の最高傑作である*Four Quartets*の発表の1944年までの活動を概観するにあたり、当時のヨーロッパ文明の没落と疲弊の状況、及び彼自身の時代に対する危機意識は充分認識する必要がある。

T.S. Matthewsの伝記によれば、Eliotの改宗は1927年6月にヘレフォード州のフィンストックの教区教会で、W.T. Stead師の司式で洗礼を受けて、彼はアングロ・カトリックになった。そして、同年11月にアメリカ市民権を棄ててイギリスへ帰化した。Eliotがローマ・カトリック教会ではなく、英国教会を選んだことに象徴されることは、Eliotの伝統意識であり、相反する要素をも取り込んで自らは新しい体系と秩序を作り上げていく英国教会のあり方に対して寄せられる共感と信頼である。そのあり方は、彼の主張する文学の伝統論と相似形をなす要素でもあるからである。英国教会は、ローマ・カトリック教会の成立に先立つ原始キリスト教の伝道によるケルト教会に連らなり、6世紀のSt. Augustineの伝

道により成長したが、16世紀のHenry 8世の宗教改革によりローマ教会から離れている。一方、同時期にヨーロッパに起った宗教改革の思想もイギリスにもたらされた結果、英国教会はローマ・カトリックの要素とプロテスタント的要素をも併せ持つことになった。さらに、Elizabeth 1世の時代にルネッサンスの精神の影響を受けて「中道」の方針をたてた¹³⁾。統合と総合の繰り返しにより、より良き伝統を樹立できた英国教会の中で、Eliotが選択し帰依した宗派は、ローマ・カトリックの制度的遺産と信仰形態を継承した高教会派の中でも特にその教義と秘跡を重視するアングロ・カトリック教会であったことは意義深いことである。

しかし、この時期のEliotの私生活は、妻Vivienneとの関係において、人間的苦悩にみちたものであった。すでにロイド銀行からフェイバー社の出版業務へと勤務を移り、雑誌*The Criterion*も主宰しており、外向きには安定しているようであっても、偏頭痛と内臓疾患、音への異常な神経過敏さにいら立つVivienneとの生活は、彼を苦しめた。そして、1933年のハーヴァードでの講演旅行から帰ってからは一方的に別居生活を執行し、ついに1947年のVivienneの死までその別居は続いた。このことは彼に良心の呵責と悲哀と、ひいては原罪意識にまで発展する罪の意識を持たせたことは明らかである。

この時期を代表する詩は、*Ash-Wednesday* (1930) と *Four Quartets* (1944) である。「悔悟」と「浄罪」という主題のもとに、神の恩寵と愛を回復すべく、聖母マリアの祈りを通じて霊的復活を願うという *Ash-Wednesday* では、*The Waste Land* で示された恐怖と虚無の錯綜する重層的なイメージが消えている。代わりに、神に背を向けて精神的放浪を続けた人間が死を前にして祈る言葉や、聖女の慈悲と愛を象徴するバラ園などが、時に緊張感を伴い、また時には清澄な色調で語られている。

Teach us to care and not to care

Teach us to sit still.

Pray for us sinners now and at the hour of our death

Pray for us now at the hour of our death.¹⁴⁾

さらにこの長篇詩に初めて鮮明に焦点が当てられているのが、「言葉」(word)である。「言葉」は、日常的レベルでの言葉(word)と、宗教的意味を伴った神の言葉である「御言葉」(Word)とが繰り返されて、ロゴスとしてのキリストの受肉の姿が幻視されている。

Eliotに縁のある4つの場所に因んだタイトルを持つ詩をまとめた*Four Quartets*は、「時」をめぐる瞑想的な詩である。その中では、時と永遠、光と暗黒、静と動、言葉と御言葉、始めと終り、生と死、死と再生、四大元である火風土水、神秘主義などの対立する主題が、緊張をはらみながら穏やかな肯定と調和へ移っていくという、詩として完成度の高さを示している長篇詩である。イギリスのグロースターシャーにある古い荘園の名である‘Burnt Norton’は、誕生から死までの有限の時を生きる人間である「私」が、過去・現在・未来について思いをめぐらすことで始まる。そして、人間的次元での「時」に囚われている「私」が、愛と楽園を象徴するバラ園で永遠の時の暗示を受けるが、第二部、第三部での「救済の光を望むべくもない魂の暗黒の世界」の状況が語られ、第四部のキリスト教的暗示を得た「時」のイメージを経て、第五部の永遠の生命を持つための詩のあり方が論じられる。次の‘East Coker’は、17世紀後半にEliotの祖先がアメリカに移住するまで支配していた荘園のあった小さな村の名であり、その場所へ向いながら詩人は自己とあらゆるものの「始め」と「終り」について思索をめぐらせる。16世紀の

スペインの神秘家、十字架の聖ヨハネが説いた救済の二つの道の一つである「否定の道」が示され、神のもとに謙虚な心で旅することにより到達できる境地が強調される。アメリカのマサチューセッツ州ケイプ・アンの海岸の沖にある岩礁群の名前である、次の‘The Dry Salvages’では、まず海へ続くミシシッピ川が「褐色の神」として描かれ、やがて果てしのない時を旅する人間のイメージが、太古から悠久のうねりを続けている海の航海者の姿を借りて表現される。ここでも、時と永遠の相が重複して至福の一瞬を得るためには、過去や未来を思い煩うことなく「いま」と「ここ」に心をこめること、苦悩しつつ祈り続けることが認識される。‘Little Gidding’は、17世紀にNicholas Ferrarが始めたキリスト教宗団があった土地であり、真冬のある日、その礼拝堂へ向う「私」の前で、周囲の風景を通して五旬節の炎が輝き、死者の霊が火の舌で真実と祈りの必要性を語る。そして時の呪縛を離れ、人間的苦悩を貫いて神の愛を悟った時、永遠性と神の祝福が与えられるのである。

And all shall be well and
 All manner of thing shall be well
 When the tongues of flame are in-folded
 Into the crowned knot of fire
 And the fire and the rose are one.¹⁵⁾

Eliotにとって、「あらゆる詩は墓碑銘」(Every poem an epitaph)であったが、*Four Quartets*は実に彼の「白鳥の歌」であった。

Eliotの批評・評論は、この時期に至って、詩と同様改宗後の変化を如実に反映して、宗教的色彩を深めている。それはまた、*Thoughts after Lambeth* (1931)、*The Idea of a Christian Society* (1939)、そして、後の*Notes towards the Definition of Culture* (1948)などの社会・文化評論の発表へも波及し、現代に生きる危機感とそれに対応すべき社会的改革、つまりキリスト教を支柱とする精神共同体の必要性を強調したものである。これらについては他の機会に検討を加えることにするが、文芸批評では論じられる詩と伝統の範囲がより広汎になっており、批評活動の円熟ぶりは明らかである。評論集*For Lancelot Andrewes* (1928)に収められた同名の批評文では、17世紀の前半に英国教会の主教として歿したAndrewes師が、英国教会の始祖であると同時に国家的境界を越えてヨーロッパの人間であったことを述べるとともに、真摯な宗教的感情に裏打ちされた知性と感受性の調和を示す彼の説教を評価している。また‘Dante’ (1929)において、まだヨーロッパが知的、及び精神的に統一されていた時代に、視覚的想像力を駆使して、Danteは*The Divine Comedy*を書いたのであり、Eliotはこのことから「本当の詩は、それがどういう内容のものかを我々が理解する前に、何か我々に伝わるものを持っている」(genuine poetry can communicate before it is understood)と断定する。Danteの作品には、人間精神の高低の幅、つまり墮落と魂の浄化の範囲について驚くべき洞察力を持っていたこともEliotによって明確にされている。また‘Religion and Literature’ (1935)において、「文芸批評は、ある一定の倫理的かつ神学的立場により完成される」(Literary criticism should be completed by criticism from a definite ethical and theological standpoint)と主張したが、*After Strange Gods* (1934)では、その鋭すぎる主張がピューリタンの偏狭性に損なわれてしまった感がある。

‘Dante’において提起された「伝達」の問題は、Eliotの目を詩の社会的意味や、詩劇に転じさせた大き

な要因である。‘The Social Function of Poetry’ (講演; 1943) では、「大衆と共通の言葉を使って、彼らの意識下にあるものを詩にすることにより、自国語をより豊かにすること」が詩人の役目であることが述べられている。さらに‘A Dialogue on Dramatic Poetry’ (1928) は、現代における詩劇の可能性をめぐって展開される一連の批評の発端をなすものである。Drydenなどが詩劇を書いた古典時代は、現代とは異なり、芸術的基準が宗教と倫理の基準と一致していた時代であり、劇作家は大衆の意識を代弁する「人間の劇」を書けたのである。一方、現代は基準の多様化と乖離が起り、あまつさえ、300年の歴史をもつ散文劇も現代の様相を十分に描ききれていない状況であっては、人間的真実を詩劇の形式で完全に表現することができたShakespeareに倣って、現代における詩劇の復活の可能性がないものかを、対話の形式で論じたものである。

宗教的・歴史的・社会的観点をも含めて、文学的価値を検討、判断するようになったEliotにとって、詩劇の創作にあたり、まず、宗教的テーマで歴史的事実に基いた劇、*Murder in the Cathedral* (1935) から始めることができたのは幸福であった。1170年12月29日にカンタベリー大聖堂で殉教した大司教、Thomas Becketの話をも題材にして書いたものであるが、1935年6月に実際にカンタベリーで上演されて成功をおさめたものである。その成功は、ギリシア悲劇の伝統であるコーラスの様式美と、Becketの精神的葛藤に焦点がおかれた劇の展開、彼を暗殺した騎士達の観客への釈明と暗殺の是非の判断を観客にまかせる結末などの、古典的伝統と現代性が見事に結実したことによる。カンタベリーの女達は、緊迫した状況とでき事の説明役として、Eliotがすでに詩作品の中で練り上げたりズミカルな抒情性と、来るべき悲劇のイメージを形成しながら、殉教の証人としてのコーラス部分を受け持つ。7年の亡命の後に故国に帰ってきたBecketが直面するのは、精神的動揺をねらった誘惑者の声である。安楽の日々の回復を勧める第一の声、現世的名声を勧める第二の声、王権よりも教会の勢力の伸張をねらうよう勧める第三の声、そして、ひたすら殉教の道を進むよう説く第四の声が、Becketとの対決のためあらわれる。全て人間的脆弱さの有無を問い正す鋭い論法でBecketを審問するが、彼は全て退けた後、幕間劇で「ルカ伝」におけるキリストの誕生と死の同時的存在の意味（この主題については、すでに‘Journey of the Magi’ (1927) と‘A Song for Simeon’ (1928) で、Eliotが逆説的に表現している）について説教し、併せて殉教の意義も神の意志であることを確認する。そして、運命の車輪を思わず車軸を形造るような四本の剣でもって彼を暗殺した四人の騎士達が自己釈明をした後で、神の意志に沿って殉教したBecketを、司祭達とコーラスが称えて劇は終る。

詩劇の可能性は、詩の文体とリズムにもかかっている以上、*Murder in the Cathedral*でEliotが選択採用したものが従来の無韻詩ではなくて、中世の宗教劇*Everyman*のリズムであったし、次の*The Family Reunion* (1939) においても詩形に日常語の要素をいかに取り込めるかが彼の課題であった。各行に一つの休止、その前後の部分にあわせて三個のストレスを置くという形式がここで確立する。舞台を現代のイギリスに移した*The Family Reunion*でも原罪の意識と罪の償い、魂の救済の様相が繰り広げられる。現代において人間は、個人の範囲を越える複雑で混迷の人生を送る宿命にあり、それと知らず無意識に見えない形で罪をおかす危険性が大きいにもかかわらず、良心を眠らせて自己を正当化する傾向があることを認めざるをえない。しかし、真正面からその事実を認め、個人の責任とともに人類全体の問題として捉える者は、キリストに従って霊的救済の道を進むのである。Eliotが文学において最終的な目標としたのも、この救済の可能性であり、また、この劇の主人公ハリーが苦悩の末、選択したことも自分自身と家全体の罪の贖いであった。彼を苦しめ続けた妻を船から突き落したのではないかという罪の重さ

に苦悩するハリーが帰ってきた家では、ハリーを家の当主にしようとして、一族が待っていた。しかし、癒されない罪の根源が、彼の誕生日前、父親が母親の圧迫に耐えきれずにハリーを身籠っていた彼女を殺そうとしたことにもあることを知り、自分の罪の意識が一族に伝わるものであることを知るのである。罪の贖いのために再び家を去って行くハリーの姿に、Eliot自身の別居中の妻に対する罪の意識が投影されていると考えるとも良いと思われる。

III

1948年から1965年の死に至るまでのEliotの晩年は、それまでの文学的修業と苦闘と個人的苦悩に対して、十分に報いられるものであった。1948年にメリット勲章と、ノーベル文学賞を授与され、文学者としてイギリス文壇のみならず、世界的な地位を得たのである。しかし、彼は詩劇の創作という課題を持ち、キリスト教の伝統を中心とするヨーロッパの文化全体を背景にする文化評論と文芸批評を書き続けたのである。

Old men ought to be explorers
Here and there does not matter
We must be still and still moving
Into another intensity¹⁶⁾

Eliotの宗教的生活は個人的時間にもかなり入り込み、ロンドンのセント・スティーヴン教会が彼の教会となり、死を迎えるまで早朝ミサに出席し、教会擁護のための評論を書き、講演をしている。

1955年に発表された‘Goethe as the Sage’は、Goetheの評価を通じて、Eliot自身の文芸批評の内容と判断が最もヒューマンイズムに理解を寄せたものであるとともに、彼もまたDanteとShakespeareの偉大さと同じ質のもの、つまりヨーロッパ文化と文学の代表者であったことを確認したエッセイである。Eliotはまず、ヨーロッパ人である作家達の共通の特色と、年を重ねるにつれて彼らの作品に魅了される理由を考察していくことにより、彼自身の批評活動の反省とその根拠とした概念、基準の正当性と妥当性を再確認したのである。まず、青年期においては、自分の好みに従って作家達を選ぶため、その選択の幅は狭く、変りやすい。批評的能力も未熟で、いわゆる文学としての偉大さなどはその基準に入り込まないのである。次の段階では、読書範囲も広がり、人生上の知恵も加わって、幅広い趣味と判断力と批評する能力を持つことができるようになるが、やはり、反発を感じる偉大な作家達が存在しうる。そして、最終的な、最も円熟した段階では、長年にわたって称賛され続けてきた、その偉大な作家達を理解できない理由を検討し始めると同時に、それは自分自身の批評能力の修練にもなりうると思う時期であると、Eliotが述べる時、これはとりもなおさず彼自身の批評家としての成長の跡づけであり、彼自身はその最後のプロセスを歩んでいることが明らかになるのである。Eliotによる、ヨーロッパを代表する偉大な文人・詩人の基準とは、「永続性」と「普遍性」であり、Dante, Shakespeare, Goetheの作品には「豊かさ」と「幅の広さ」と「統一性」があること、しかも、自己の国家、時代、自国語などに拘束されつつもそれらを通じて、広くヨーロッパ的といえるものを持っていることが強調されている。Goethは、ヨーロッパを代表する詩人として、人間を愛情深く理解できる知恵とそれを詩で表現する能力

を持った賢明な人間であったことが説明されている。

一方、彼の詩劇についての批評も創作原理として興味深い論を展開している。まず1951年の‘Poetry and Drama’では、劇における言語の特殊性を強調し、たとえ日常を描く文であっても詩まで昇華されていることが望ましいことが述べられている。また、‘The Three Voices of Poetry’ (1953) では、詩人が詩の中で作り出す声は三種類あることが説明されている。つまり、1) 詩人が自分について語る声で、抒情詩的性格を持つ、2) 聞き手に語りかける声、3) 劇の中で登場人物が韻文で語る声、の三種類の声をあげて、詩劇では、この三つの声が全て聞かれることが具体的な例をもって分析、総合されている。

Eliotの最後の三つの劇は、大衆への伝達という課題に応えるべく、時代も内容も現代的なものに設定され、初期の詩劇作品の緊迫した宗教性や悲劇性を脱して、より一般的な人間が直面する人生上の苦しみや選択、あるべき自己への模索などがモチーフとなっている。しかし、いずれも、愛による魂の救済は詩劇を通じて脈打っている基本的な主題であり、登場人物達が抱える問題の解決手段となっている。*The Cocktail Party* (1949) は、*Four Quartets*で示された救済への二つの道を、詩劇の形式で表現したものである。ロンドンに住む弁護士のエドワードは、シーリアと愛し合っていると思っているが、妻のラヴィーニアに去られると、自分が誰も愛さない人間であることに気づく。また、ピーターを愛しているラヴィーニアは結局誰にも愛されない人物であることを自覚する。精神分析医のライリーに勧められて、この二人が選んだ道は、俗世にあって自己の限界と運命を受け入れて生きていく、穏かな「肯定の道」(the Affirmative Way)であった。一方、この世では求められない愛の対象として、エドワードを愛していたシーリアは自分の見当違いを自覚して、孤独と空虚さに苦しみ、信仰の道である「否定の道」(the Negative Way)を選び、外国で殉教する。「否定の道」とは俗世での自己そのままの自我を離れ、神の愛と声に従うことである。「肯定の道」を選択した人間達が思いもつかぬ犠牲と苦しみを経ても、この世での空虚感、無気力、愛の不毛、そして、何よりも孤独感から逃れ、神とともに歩む道であるといえよう。エドワードの家でのカクテル・パーティーで始まり、二年後の同じ場所でのカクテル・パーティーで終るこの劇は、ごく普通の人々の人生に待ちうける人生の深淵、愛と孤独と不条理の状況とその解決方法を呈示したものである。*The Confidential Clerk* (1953) では、主人公コールビーをめぐる、親子間の葛藤、アイデンティティ確立に伴う暗中模索などを中心に、ファースト要素が認められる詩劇である。この作品の中に出てくる喜劇的人物像により、*The Cocktail Party*以前の作品にあった深刻さや緊張感が多少薄れてはいるが、主人公コールビーの生れや親などの過去についてのアイデンティティと、天職を求めてのアイデンティティ追求という二重の意味での自己確立の厳しさの中に、作者Eliotのアイデンティティの追求の跡を垣間見ることができよう。

Eliotの詩劇で繰り返される統一主題は、人間の自己欺瞞による苦しみ、愛による真実への覚醒とあるべき自己の再発見である。彼の最後の詩劇、*The Elder Statesman* (1958) の老クラヴァトンも自己の虚像を作り上げつつ、たえず現実とのきしみと内心の不安を感じ続ける。政治家として、実業家として活躍した後、健康を害して隠退した彼は、Eliotの二度目の妻を髣髴させるような娘モニカと暮している。良心の呵責を感じている過去の秘密を知るゴメスが出現して以来、彼は苦しみ続けるが、励ますモニカを相手に過去を語り、自己の過去の亡霊から解放された後、死を迎えるのである。この作品には、Eliotが晩年到達した実生活上、精神上的の幸福な状況がうかがわれる。彼の一生は、自己の信念に従い、人生上の困難と直面しつつ、より広汎で大きなものを探究し続けた一生であった。アメリカの中西部からイギリスへ、そしてヨーロッパの全体像へと文学的かつ文化的な視野を広げ、ヨーロッパの統一理念

としてキリスト教的理想の可能性を展開した。その行動と思索の中心は、根源への探究であった。

We shall not cease from exploration
And the end of all our exploring
Will be to arrive where we started
And know the place for the first time.¹⁷⁾

1965年1月4日、Eliotは76歳で死んだ。彼の遺骨は遺言により、祖先の出立の地イースト・コーカーの聖ミカエル教会に安置された。奇しくも同年12月7日、1962年から続行中であった第二バチカン公会議が、教令“*Ad Gentes*”を公布して閉会した。トレント公会議（1545～63）以来の制度の改革に重点がおかれ、自国語による典礼、聖書の重視、宗派と他宗教を越えての対話などが主張された。このことは晩年、キリスト教的精神共同体の可能性と確立を考え続けたEliotの生涯を考察するにあたり、意義深いことである。

Notes

- 1) T.S. Eliot, *The Complete Poems and Plays of T.S. Eliot* (London: Faber & Faber, 1969), P.182.
- 2) George Sampson, *The Concise Cambridge History of English Literature* (London: CUP, 1970) の最終章のタイトルは‘The Age of T.S. Eliot’となっており、その時代の代表的人物であることは明らかである。
- 3) Lyndall Gordon, *Eliot's Early Years* (London: OUP, 1977), P.60.
- 4) T.S. Eliot, *For Lancelot Andrewes* (London: Faber & Faber, 1928), P. 7.
- 5) T.S. Eliot, *On Poetry and Poets* (New York: the Noonday Press, 1943), P. 243.
- 6) T.S. Eliot, *The Complete Poems and Plays of T.S. Eliot*, P. 182.
- 7) T.S. Matthews, *Great Tom: Notes Towards the Definition of T.S. Eliot* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1973), P. 17.
- 8) T.S. Eliot, *The Use of Poetry and the Use of Criticism* (London: Faber & Faber, 1933), P. 106.
- 9) T.S. Eliot, *The Complete Poems and Plays of T.S. Eliot*, P. 73.
- 10) T.S. Eliot, *Selected Essays* (London: Faber & Faber, 1932), P. 21.
- 11) *Ibid.*, P. 145.
- 12) Stephen Spender, *Love-hate Relations: A Study of Anglo-American Sensibilities* (London: Hamish Hamilton, 1974), P. 154.
- 13) T.S. Eliot, *For Lancelot Andrewes*, P. 12.
- 14) T.S. Eliot, *The Complete Poems and Plays of T.S. Eliot*, P. 90.
- 15) *Ibid.*, P. 198.
- 16) *Ibid.*, P. 182-83.
- 17) *Ibid.*, P. 197.